

どうとくのひろば



5年生の道徳の授業

主題名：限りある命

ねらい：【生命の尊さ】

宮越さんが闘病している時の気持ちや詩で伝えなかったことを想像することを通して、限りある命を懸命に生きることの大切さに気づき、これからの自分を見つめる。

教材名：「電池が切れるまで」学研

あらすじ：

小学6年生の宮越由貴奈さんは、小児がんと診断され、苦しい治療を受けながら生活しています。病気と向き合う中で、「命は電池のように取り替えられない」という思いを詩「電池が切れるまで」に込めました。その詩を読んだ人々は、宮越さんの思いや生き方に触れ、命について考えていきます。

授業での具体的な様子

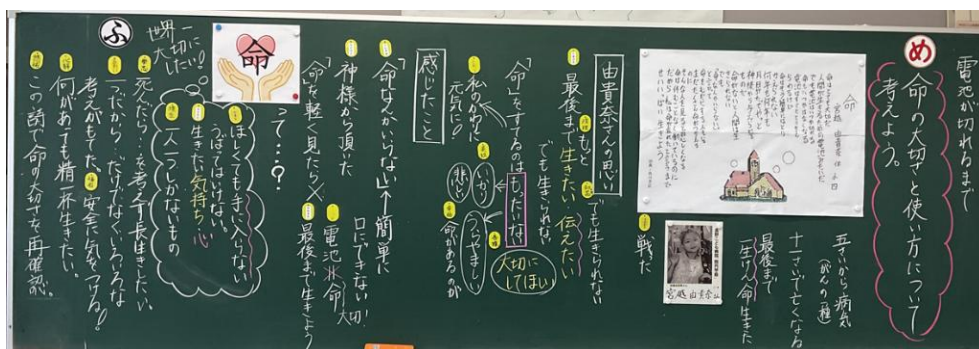
「命は自分だけのものではない」「動物も人間も、一つしかない命を精一杯生きている」など、命に対する思いを確認した後、本時のめあてを設定しました。

教材を読んだ後は、「宮越さんは、がんと告げられた時、どんな気持ちだったのだろう」「治療を続けている時、どんな思いで過ごしていたのだろう」と問い掛けました。子供たちからは、「自分が病気だなんて信じられなかったと思う」「早く元気になりたいと思っていたはず」「治療がつらくて、やめたいと思ったこともあったのではないかなど、宮越さんの苦しさ寄り添う意見が出されました。また、「それでも治療を続け、最後まで生きようとしていたことが本当にすごい」

「苦しくても命を大切にしようとしていた」と、生き方に目を向ける姿も見られました。

続いて、詩「電池が切れるまで」を読み、そこに込められた思いについて考えました。一人一人が感じたことをワークシートにまとめながら交流すると、「生きたくても生きられない人がいることを知ってほしい」「命は電池のように取り替えられないからこそ大切にしたい」「どんなことがあっても命を粗末にしてはいけない」など、多様な考えが広がりました。

最後に、「命とは…」という言葉に、自分なりの答えを書きました。「家族から受け継いだ大切なもの」「一人一人に一つしかないもの」「自分も周りの人も大切にするためにあるもの」など、それぞれが自分の言葉で表現し、「これから嫌なことがあっても投げやりにならず気持ちを前向きにもちたい」「なんでもすぐに諦めず、自分のできることを精一杯頑張りたい」と、今後の生き方につなげて考えを深めることができました。



道徳だよりへのご質問・ご感想

切り取り () 年 () 組 児童名 ()

感想や、お子さんとのような話をされたかなど、一言でも構いませんので教えていただけると嬉しいです。今後の授業づくりの参考にさせていただきます。

